

# 学位論文内容の要旨

愛知学院大学

論文提出者名

呂 其俊 (LU QIJUN)

論文題名

『トゥカン三世の生涯と思想』

(論文内容の要旨)

歴史上の人物に関する研究は、仏教研究においても非常に重要な要素である。仏教がチベットに伝来してから既に 1400 年が経っている。長い歴史の流れの中で、多くのチベット仏教の高僧はチベット仏教の発展に重要な役割を果たしてきた。彼らは自身の所属する宗派の儀礼や教理を代々伝承していき、その結果、思想的にも、儀礼的にも、チベット仏教が今日まで連綿と続いているのである。

トゥカン三世ロサン・チューキ・ニマ (thu'u bkwan blo bzang chos kyi nyi ma, 1737~1802) は清朝の駐京ホトクトであり、その間、アムド地方のゴンルン寺 (佑寧寺、dgon lung byams pa gling)、タール寺 (sku 'bum byams pa gling)、チャキュン寺 (bya khyung dgon pa) のティパを担い、仏法を宣揚すると同時に多くの作品を著した。彼は、チベット仏教の歴史で有名な仏教思想家であり、歴史学者であり、文学者であり、政治家でもあった。彼は一生の間に多くの著書を残したが、特に『一切宗義』(grub mtha' thams cad kyi khungs dang 'dod tshul ston pa legs bshad shel gyi me long)、『チャンキャ三世伝』(khyab bdag rdo rje sems dba'i ngo bo dbal ldan bla ma dam pa ye shes bstan pa'i sgron me dpal bzang po'i rnam par thar pa mdo tsam brjod pa dge ldan bstan pa'i mdzes rhyan zhes bya ba)、『佑寧寺誌』(dgon lung byams pa gling gi dkar chag) などの作品が広く知られ、チベット仏教の学僧や国内外のチベット学研究者によって注目されている。

中国、日本、欧米では、トゥカン三世の作品が非常に重視されている。多くの論文にもトゥカン三世の論説がよく引用されている。しかし、今日まで彼に関する総合的な研究は未だ現われていない。今までの研究書には、トゥカン三世に関する記述が散見されるが、同様の内容が何度も引用され、不正確でかつ不十分のところも多い。

従って、本論では、クンタン三世の『トゥカン三世伝』(thu'u bkwan chos kyi nyi ma'i rtogs brjod pad ma dkar po) を研究テキストにして、客観的な態度でトゥカン三世の一生を検討した。『トゥカン三世伝』の著者であるクンタン三世コンチョク・タンペードンメ (gung thang 'jam pa' i dchangs rje btsun dkon mchog bstan pa' i sgron me, 1762~1823) はラブラン寺の四大金座活仏の一人であり、清の時代の有名な学僧でもある。クンタン三世は、蔵暦第十三勝生水馬年(1762) 2月18日に今のアムド地方の夏河県の佐蓋曼瑪郷 (mdzod dge zhes pa yul) 上隆康木村の「噶 (dge)」姓の家族に生まれた。クンタン三世は学識が深く、一生、教務に尽力し、何度も巡視に出かけ、宗教教育に大きく貢献した。又、彼は著述が多く、その12函の作品の中で、宗教に関する作品のほか、『水木格言』などの文学作品もあり、著名な僧である。クンタン三世は45歳以降、歴代の大徳の伝記を執筆する為に、また、浮世の喧しさから離れたい為に、外出しないことを決心した。火虎年(1806)から水羊年(1823)までの間、彼は本寺と静修院に閉じこもっていた。この時期、彼は一連の著作を書いたのである。

本論では、ラサ・シヨルパ版の『トゥカン三世全集』に収録されたクンタン三世の著した『トゥカン三世伝』、トゥカン三世の著した『トゥカン二世伝』と『一切宗義』を参考テキストとし、また、コンチョク・ツェタン(gnya' gong dkon mchog tshe brtan)の校訂したチベット語版『トゥカン三世伝』、劉立千の中国語訳の『トゥカン宗派源流』、『チャンキャ三世伝』、及び立川武蔵を始めとする日本語訳『一切宗義』(10冊)を参照しながら、チベット語版の『トゥカン三世伝』と『一切宗義』「中国儒釈道教」の章を翻訳した。また、それを踏まえて、本論を6章に分け、トゥカン三世と彼を取り巻くチベット仏教の背景、トゥカンの転生活仏系統とゴンルン寺、トゥカン三世の認定と活仏教育、トゥカン三世の上京とアムド地方のチベット仏教への影響、『一切宗義』に見られるトゥカン三世の仏教観と顕教・密教の思想、『一切宗義』の中の儒・釈・道教の三教を、それぞれ詳しく論じた。

拙論では、宗教学、歴史学、社会学、文化学、文献学、フィールド調査などの理論と方法を総合的に用いた。筆者は、2009年から2012年まで数回、チベットに滞在し、トゥカン三世の活動拠点であったとゴンルン寺、花園寺、土観村、鹿角哇寺、塔爾寺などの多くの寺院、修行地、さらには北京の雍和宮、黄寺、旃檀弘仁寺などの実態調査を行った。これは本研究を進める上で大きく貢献した。文献ばかりではなく、実際にトゥカン三世の足跡を辿ることは重要であると確

信する。また、筆者は、テキストを考証する上で、「知人論世」と「略小存大」の評価態度を採用した。つまり、トゥカン三世個人を描く上で、彼が生きた時代背景を考察するやり方である。これは個という小に、社会という大が宿るという考え方に基づく。各章の内容は次の通りである。

第1章の「チベット仏教の歴史とゲルク派の展開」では、主にチベット仏教の歴史、中でもゲルク派の展開を概観した。チベットへの仏教伝来と前伝仏教（ガダル）、後伝仏教（チダル）、チベット仏教の四大宗派と密教、ゲルク派以外の三大宗派の特徴、ゲルク派の開祖ツォンカパとダライ・ラマ、清朝下のチベット仏教、ダライ・ラマとパンチェン・ラマ等を中心に、トゥカン三世の『一切宗義』の内容と関連させて年代を追いながら、チベット仏教を俯瞰した。

第2章の「ゴンルン寺とトゥカン転生活仏系統」では、ゲルク派のアムド地方布教、湟北地方の諸寺の拠点僧院、トゥカン転生活仏系統の転生譜、『トゥカン三世伝』という4節に分けて、それぞれ、トゥカン転生活仏系統の起源、トゥカン転生活仏の系譜およびゲルク派のアムド地方での布教の様子を検討した。トゥカン転生活仏系統の拠点僧院とも言うべきゴンルン寺の歴史と現状を研究した。また、チベット語文献の『トゥカン三世伝』とは何か、誰が執筆し、どのような章立てになっているかなどを詳しく紹介した。

第3章の「トゥカン三世の転生活仏の認定と教育」では、トゥカン三世の転生活仏の認定と、トゥカン三世の活仏教育という2節に分け、主に『トゥカン二世伝』と『トゥカン三世伝』に基づいて、トゥカン三世の認定、受戒とチベット仏教の顕教と密教の教育状況を詳細に紹介した。特にゲルク派はどうして転生活仏制度を採用したのか、このシステムはどうなっているのか、アムド地方へのゲルク派の布教は何時始まりどのような特徴があるのか、さらにアムドとチベット中央との寺院の関係はどうなっているのか、これらの問題点を順次解決していく手法を用いながら、トゥカン三世個人の履歴とそこに潜む当時のチベット仏教の背景を表面化させた。

第4章の「トゥカン三世の駐京と「政教一致」の下で生きる転生活仏」では、トゥカン転生活仏とチャンキャ転生活仏との関係、トゥカン三世が京師に駐錫した様子、チベット仏教の特徴である「政教一致」の3節に分けて考察を加えた。チベット語の『トゥカン三世伝』の必要箇所を日本語に翻訳し、トゥカン三世の上京とアムド地方での布教の状況を明らかにし、さらに清朝のチベット政策、およびこの政策の下のチベット仏教活仏の布教の状況を検討した。

第5章の「トゥカン三世『一切宗義』の思想」では、トゥカン三世が著した『一切宗義』に関

する現在までの翻訳と研究の内容を詳しく説明した。『一切宗義』の思想的側面では、サキャ派、チョナン派、ゲルク派の思想的特徴に触れ、顕教ではゲルク派の「中観帰謬論証派の空思想」について詳述した。さらに密教では、「生起次第」と「究竟次第」の両方を重視するゲルク派と、それを援用するトゥカン三世の思想的特色を解明した。トゥカン三世はチベット仏教の各宗派の思想内容をなるべく客観的に紹介しようと努力しているが、自身の所属するゲルク派の価値観まで捨て去ることは出来なかった。これが彼の仏教観に対する限界であろう。

第6章の「『一切宗義』「儒・釈・道の章」について」では、『一切宗義』「中国儒釈道教」を翻訳し、トゥカン三世の中国の儒・釈 [= 仏]・道の三教に対する認識の程度を詳しく紹介した。さらに中国の儒・釈・道の三教がチベット文化にどの程度影響を与えたかを探求した。また、チベット文化の発展と、道教のような漢文化とチベット文化との交流の様子をトゥカン三世の目線で紹介した。さらに中国仏教の歴史をトゥカン三世がどの程度理解していたかも解明した。

以上の6章を通じて、トゥカン三世の生涯と思想を詳しく検討した。その上で、チベット仏教の歴史、清朝のチベット政策、チベット仏教の転生活仏制度、チベット仏教の活仏教育、アムド地方におけるチベット仏教などの内容を深く研究し、トゥカン三世と彼の仏教思想のより一層の理解に努めた。その結果、

第1に、18世紀のアムド地方、チベットのウー・ツァン地区、モンゴル、清朝を包括したチベット仏教の世界を明らかにした。従来トゥカン三世は『一切宗義』の作者としての価値しか与えられていなかった。世界のチベット学会は同書を通じてチベット仏教の各宗派の思想を詳しく知ることができたのである。ただ、トゥカン三世はアムド出身で、チベット中央に学び、清朝の北京にホトクトという僧官として駐錫した人物である。彼の生涯を辿ることで18世紀の、チベット、モンゴル、中国内地の「チベット仏教世界」の状況を明らかにすることができた。これは現在、早稲田大学の石濱裕美子教授らの進めている「チベット仏教世界の形成と展開」研究の一助となるものと確信する。

第2に、トゥカン活仏がチャンキャ活仏と共にアムド地方を政治的に統治した様子を明らかにした。彼が多く寺院を建立することにより、部族の信仰を集め、それにより清朝の政策を実現するという、政教一致の政策を明らかにすることが出来た。トゥカン三世は18世紀の清朝の有名なゲルク派の僧官として清の駐京ホトクトを務め、3回上京した。その間に彼はチャンキャ国

師および各駐京ホトクトと密接な関係を保っていた。彼は、モンゴル族やチベット族、五台山、承德外八廟、および北京のチベット仏教の掌握に非常に重要な役割を果たした。彼は広大なモンゴル地方とアムド地方の各部族から絶大な信仰を集めることにより、清朝のモンゴルやアムド地方支配に大きな貢献をした。拙論では、『理藩院則例』、『乾隆上諭檔』などの清朝の歴史文献を踏まえ、トゥカン三世の伝記を中心に、トゥカン三世の視点から清朝のチベット政策とゲルク派のアムド地方布教の様子を解明した。

第3に、トゥカン三世の『一切宗義』「儒・釈・道の章」を日本語に翻訳し、チベット人が初めてチベット語を用いて漢民族の文化である陰陽五行思想、儒教の哲学、道教の哲学、中国仏教などを記述した同章の内容を日本語で最初に紹介した。さらには、チベット文化の視点から、漢民族とチベット族の間の文化交流を記したものを拙論で紹介した。トゥカン三世の記述は両民族の文化交流史上、重要なものであることを明らかにした。

第4に、クンタン三世のトゥカン三世の伝記を底本とし、トゥカン二世のチベット語の伝記、チャンキャ三世のチベット語の伝記、一切宗義などの関連資料を参照し、また清朝の中国語の歴史文献や日本語の先行研究を踏まえて、初めて詳細にトゥカン三世の生涯と思想を研究し、紹介することが出来た。今日までトゥカン三世の生涯と思想に関する詳細な研究書は著わされていない。拙論によって彼の生涯と思想が解明されたと自負するものである。